

南フランス・ガール県東部のロマネスク聖堂（４）

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Département du Gard(4) :
Uzès et ses alentours.

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent à l'est du département du Gard, surtout autour d'Uzès. Ce pays correspond approximativement au sud de l'ancien diocèse d'Uzès, et aujourd'hui au nord de l'arrondissement de Nîmes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿ではガール県東部（およそ現在のニーム郡 Arrondissement de Nîmes）のユゼスならびにその周辺に点在する中世期のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを直接訪問・調査し考察を加えた。聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号（30）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。私有地であったりアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問調査できなかった聖堂には▲を記した。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが、全体を通してのビブリオグラフィーは最後にまとめている。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（<http://nn-provence.com>）で閲覧可能である。

30.2 ユゼス (Uzès) とその周辺

30.2.1a ユゼス／サン＝テオドリ大聖堂 (Cathédrale Saint-Théodorit, Uzès)

ユゼスはガール県東部の中核都市の1つで、バニョル＝シュル＝セーズ、アレス、ニームが形作る三角形のほぼ中央に位置する。ニームからは約 24 キロ、ローヌ川対岸のアヴィニヨンからは 39 キロである。その歴史は古く、紀元前 2 世紀後半頃にケルト人（ヴォルク・アレコミク族）のオッピドゥムから古代ローマのカストルムへとその姿を変えた。ユゼスの古代名は「ウケティア」（Ucetia）である。有名なポン・デュ・ガールをへてニーム（古代名ネマウス）まで約 50 キロにわたって水を引いていたローマ水道の水源は、ユゼスの街のすぐ東のアルゾン川沿いの溪谷公園内にある。「ユールの水源」（Fontaine d'Eure）と呼ばれ、その水源から約 800 メートルほど南へ歩くと、古代の分水施設の遺構が今も残っている。水道を流れる水量調整のための施設で、余分な水は敷居板をはめ込んでアルゾン川に流していた。この施設はユゼスのサン＝テオドリ旧大聖堂のちょうど真東 300 メートルに位置し（ただし直接には行けない）、古代の導水路の遺構がそこからさらに南に向かって森の中に続いている。

この地方にキリスト教が伝わったのは 2 世紀後半から 3 世紀にかけてのことで、最初はヴィエンヌ司教区に属していたが、5 世紀にはユゼスにも司教座が置かれた。ユゼスの初代司教はコンスタンティウス（またはコンスタンス、在位 419-462 年）とされる。以後、ユゼス司教は世俗の封建領主と共にこの街の支配者として君臨したのであるが、アルビジョワ十字軍によるラングドック征討以後はさらにそこに国王が加わった。この三者による支配の有様は複雑で、中世以来ユゼスの街や土地などさまざまな権益を分け合い、そしてしばしば対立した。現在残されている 4 つの塔、すなわち北から封建領主の 2 つの塔（現在の公爵宮殿にある副伯の塔およびベルモンド塔）、司教の塔、国王の塔が並び立つ姿が、そうした複雑な支配・対抗関係をよく表している。宗教改革期にはユゼスでは司教でさえプロテスタンティズムに親和的となるほどプロテスタントの勢力が優勢となり、カテドラルも破壊された。彼らは 17 世紀のうちにいったん街から排除されるが、18 世紀初めのいわゆる「カミザール戦争」の際には、ユゼスとその近隣地域はプロテスタントの避難場所にもなったために、戦乱によってかなりの被害を受けている。ユゼス司教区は大革命後の 1790 年に廃止され、1801 年のコンコルダの際に教皇ピウス 7 世がそれを認めた。最後のユゼス司教 Henri Benoît Jules de Béthizy de Mézières はイギリスに亡命し、1817 年にロンドンで没している。旧ユゼス司教区はいったんアヴィニヨン司教区に入れられた後、1822 年にニーム司教区に編入された。

一方ユゼスの世俗領主の歴史は 11 世紀にさかのぼる。最初の領主はエルゼアール (Elzéart d'Uzès, 1045?-1125) でトゥールーズ伯レーモン 4 世の (Raymond IV de Saint-Gilles) の臣下であった。この一族は 12 世紀以降、ユゼスに城塞を建設し、漸次それを拡張・整備していった。例えば現在公爵宮殿に残っているベルモンド塔は、エルゼアールから数えて 3 代目のベルモンド 1 世 (Bermond Ier, 1105-1181) の時に建設されたと考えられている。彼らは封建関係ではトゥールーズ伯に臣従したが、しかし同時に拠点となる城館はユゼス司教の土地に（あるいは隣接する形で）保有するという複雑な立場にあった。また一族の内部でもユゼスの「カス

トルム」の内部が細かく分割され領有された。そのうちユゼス家の分家であったレーノン 4 世 (Raynon IV de Caylar、ラ・トゥール＝デアグの領主でもあった) とその一族は、ユゼス家本家の城 (後の公爵宮殿) のすぐ南側に城館を所有していたが、1242 年以降漸次それをユゼス司教に売却したため、そこは司教の城となり、そこに建っていた塔も司教の塔と呼ばれるようになった。司教の城はその後は監獄として使用された。さらにその南側に、12 世紀以来ユゼスのカストルムの約 4 分の 1 の土地と城館を所有していたユゼス家の分家でモンフォコンの領主でもあったギヨーム (Guillaume de Laudun) は、その城館を 1493 年 (または 1498 年) に国王シャルル 8 世に売却する。以後、そこに建てられていた塔は国王の塔と呼ばれるようになった。また城館は国王の裁判所となり、大革命まで監獄としても使用された。司教の城と国王の城は、大革命の後の 1812 年以降しばらくの間、共にユゼスのコミューンがやはり監獄として使用した。

ユゼス一族が支配する領分のうち、レーモン・ラスカス (Raymond Rascas) が当主であったユゼス家の本家とその筆頭として 13 世紀初め以来ユゼスのカストルムの約半分という最も大きな部分を所有していたが、その子孫ロベール 1 世 (Robert Ier d'Uzès) は、1328 年にフランドル反乱の鎮圧の際に国王フィリップ 6 世を支援した功績により副伯 (vicomte) とされた。その副伯家の最後の当主となったシモーヌ (Simone d'Uzès) は 1486 年にヴィヴァレ (今のアルデッシュ県) のクリュソルの領主であったジャック 1 世 (Jacques Ier de Crussol) と結婚し、ユゼスはクリュソル家が継承することになるが、その子孫であるアントワヌ・ドゥ・クリュソル (Antoine de Crussol) が 1565 年に国王シャルル 9 世によって公爵に引き上げられ、クリュソル家はユゼス公家としてフランス国内でも最高ランクの貴族となる (アントワヌはボーケールのセネシャルとラングドック総督にも任じられている)。ユゼスの副伯の城も公爵宮殿 (Duché) として、ユゼス公家の繁栄のシンボルとなった。かくしてユゼスの中には公爵 (かつての副伯) の城と塔、司教の城と塔、そして国王の城と塔が並び立つこととなる。公爵宮殿は大革命によって国有財産として売却されてしまうが、その後クリュソル家の子孫が買い戻し、修復工事なども進められて、現在はクリュソル家の所有ではあるが一般に公開されている。なお公爵宮殿内にあるゴシック様式の礼拝堂は、もとは 15 世紀に建てられたものであるが、1840 年に大々的に改修されている。

サン＝テオドリ大聖堂 (旧司教座聖堂で現在はユゼスの教区教会) は、最初は 11 世紀終わり頃 (1090 年頃から)、古代のローマ神殿があった場所に建設され、献堂式は 1096 年に教皇ウルバヌス 2 世によって行われた。その建物はクリュニーの影響を受けたものであったとも言われる。1177 年、アルビジョワ十字軍侵攻の際に破壊され、13 世紀にかけて再建されるが、宗教戦争のさなかの 1563 年 (ただし 1553 年、1554 年など諸説あり) にプロテスタント勢力によって、司教館や聖堂参事会のクロワトル



30.2.1a Tour Fenestrelle

と共に大きく破壊され、1621年には完全に取り壊された。現在の建物は1645-1663年に再び建て直されたものである。ロマネスク期のものとして知られるのは、大聖堂の南西角に立つ「フネストレル塔」(Tour Fenestrelle)である。イタリアのカンパニーレに類する高さ42メートルの円塔で、聖堂に付けられた円形の鐘塔としてはフランスでは他に例を見ない。基壇となる方形の建物の上に全部で6段が重なり、上に行くに従って少しずつ小さくなる。もともとは12世紀後半に建てられたが、宗教戦争の災禍を免れたオリジナルの部分は基壇および下の2段だけで、上の4段は17世紀に修復・再建されたものである。ただしロマネスク期のオリジナルの雰囲気は忠実に再現したものとはなっている。かつては大聖堂の北側にも同様の円塔が建てられていたのではないかとと思われる。

円塔部分の各段は、歯車状のコーニスによって区切られる。最下段は、細長い壁付き円柱に支えられたニッチの半円アーチのアーケードで、その円柱にはアカンサスと渦巻きという柱頭彫刻が付けられている。下から2段目も同様にニッチの半円アーチのアーケードであるが、そのアーチは二重になっていて、その内側は半円形の小さなタンパン(無装飾)となっている。またそのアーケードのうち、3ヶ所では壁付き円柱がなく、2つ一組となった半円アーチの開口部が付けられており、その2つのアーチの中央部は短い小円柱が受け止めている。この段のアーケードを支える壁付き円柱の柱頭彫刻は、2つの半円頭形の開口部を支えるそれを含めてすべてアカンサスであるが、最下段のそれよりもかなり図形的なものである。下から3段目は、同じように壁付き円柱(柱頭はアカンサスの彫刻)の上に半円形のアーチがアーケードとなって並び、アーケードの各ベイの中には、枠組みが二重になった半円形アーチが2つ一組となった縦長の開口部が付けられている。そのアーチを受け止める小円柱の柱頭は図形的なアカンサスである。またその開口部の上には二重になった菱形の小さなニッチが並んでいる。その上の段は、小さな半円形の壁アーチがロンバルディア帯のように付けられ、その内側にはやはり2つ一組となった二重の半円形アーチからなる縦長の開口部が並ぶ。ロンバルディア帯のようなアーチを受ける円柱の柱頭彫刻には、人間や動物の頭が見られる。開口部を支える小円柱の柱頭彫刻は図形的である。円塔の上2段はほぼ同じ仕様である。壁付きアーチはなく、枠組みが二重になった2つ一組の半円頭形の開口部が並ぶ。その開口部を支える小円柱の柱頭彫刻は植物文様であるが、下の段よりもさらに図形的なものとなっている。

この「フネストレル塔」の下のロマネスク期の部分には、内部に螺旋階段(vis)が付けられている。サン=ジル(Saint-Gilles)の内陣(トランセプト北側)の遺構として残された円塔の螺旋階段と比較されるものである。時期的にはユゼスのものがサン=ジルのものよりも少し古いとされている。

現在のサン=テオドリ大聖堂は17世紀のものであるが、西ファサードはさらに新しく、



30.2.1a Cathédrale Saint-Théodorit

1874年の作である。扉口はペトロとパウロの立像の間に開き、タンパンには中央の聖母子をはさんでその両側にユゼスの最初期の司教である聖フィルマン（フィルミヌス）と聖フェレオル（フェレオルス）の姿が見られる。内部は大きな身廊とその両側に礼拝室が並び、さらにその上には3階まであるトリビューンが付けられている。ほぼ中央に南北幅の狭いトランセプトがある。聖堂の北西の端の礼拝室には聖フィルマンの横臥像を収めたガラス張りの聖遺物ケースが置かれている。堂内西端には17世紀後半の見事なオルガンが据えられている。後陣は外部は平面形であるが内部は半円形で、中央には19世紀の大理石の祭壇が置かれ、その背後にはやはり19世紀の絵画「キリストの降架」が飾られている。

Albiouse (1887) pp.88-89, p.322; Albiouse (1903) pp.63-66; Béraud (1947) pp.62-64, p.316; Bardy et al. (1966) pp.164-165; Cottle (2002) p.228; Droste (1990) p.173; Pérouse et Montclos (1996) pp.542-549; Mesqui (2000) pp.377-411; Nougaret et Saint-Jean (1975) p.49; GV.

30.2.1b ユゼス／初期キリスト教時代の地下クリプト（Crypte, Uzès）▲

公爵宮殿のすぐ東側に「place du Duché」があり、クリプト（地下礼拝堂）は、その5番地の建物（「passage du jardin des Jésuite」の角にあたる）の地下にある。17世紀にイエズス会がこの建物を所有していた時に発見された。建物はその後サン＝モール会が所有し、20世紀初め頃には人造洞窟のような装飾が施されていた。現在はユゼスのコミューンの所有ではあるが、通常は一般公開されていない。

かつてその上に建っていた古い礼拝堂の名残であるとされるこのクリプトは、小さな身廊（nef）とその奥の聖所（sanctuaire）からなっていて、身廊には丸い石の洗礼盤が置かれ、そのすぐ上の壁には頭に光輪を付けた洗礼者ヨハネと思われる人物の浅浮き彫りがある。両目には青いガラス玉がはめ込まれている。また聖所の壁には、縁なし帽をかぶり、司祭の祭服のような膨らんだチュニックを着て両手を左右に広げた人物の、1.75メートルもの高さの大きな浅浮き彫りがある。一見「オランス」（またはオラント、「祈る人」の意）のようにも見えるが、頭の上に十字が彫刻され、両手にはクギを刺されたような穴があることから、これはキリストではないかと言われる。この不思議なクリプトは、ローマのカタコンブのような雰囲気をつたえており、実際2世紀から3世紀の初期キリスト教時代に、迫害を避けて密かにキリスト教徒が集まった礼拝所であったとされてきた。ただし G. Barruol などは、16世紀の宗教戦争の際にカトリック信徒が礼拝のために使用したものではないかと指摘しているし、またキリストとされる大きな浅浮き彫りの両手のクギ穴や頭の十字についても、古代末期ではなく、もっと後になって付けられたものとする見方もある。

Albiouse (1880) pp.5-14; Albiouse (1887) p.323; Albiouse (1903) pp.14-16, pp.358-360; Barruol (1995) pp.45-46; Béraud (1947) pp.15-18; Hery (1968) p.31; Sapin (2014) p.14; Wagon et al. (2016) pp.36-37.

30.2.1c ユゼス／サン＝ローマン教会 (Église Saint-Roman, Uzès) 遺構▲privée

公爵宮殿 (Duché) から市役所の東側の通り« rue du Salin »を北へ 30 メートルほど歩くと東へ向けて分かれる« rue Saint-Roman »となる。その 5 番地の小さな庭に、サン＝ローマン教会のものであったと思われる小さな後陣の遺構 (11-12 世紀頃) が残されている。ただし現在は私有地となっていてアクセスできない。この聖堂についてはあまり多くのことは分らない。1561 年にプロテスタントがここを占拠したが 1598 年に取り壊し、より大きな寺院を建てた。ナントの勅令の廃止 (1685 年) の後は再び破壊されて、ユゼス司教がその場所に大きなセミネール (学校) を建てたという。しかしそれも現在は残っていない。

Albiouse (1903) pp.114-115, p.153, p.171; Béraud (1947) p.321; Wagon et al. (2016) p.30.

30.2.1d ユゼス／サン＝テュジェーヌ教会 (Église Saint-Eugène, Uzès) 遺構▲privée

ユゼスから県道 D981 を南へ約 3.5 キロで南に折れて 200 メートルである。今は大型スーパーなどが並ぶ商業地区のすぐ東側で、アルゾン川の北岸 100 メートルに位置する。この場所では古代から中世前期頃までの住居の遺構が発掘されている。サン＝テュジェーヌは、1156 年に国王ルイ 7 世が発給した文書の中に、ユゼス司教の所有するプリウレ (小修道院) としてその名が見出せる。この地所も大革命までユゼス司教の世俗領の一部であり続けた。現在は私有地の中であって農家などの建物に囲まれておりアクセスできない。保存状態は良くなく、半円筒形であったと思われるヴォールトも失われている。後陣部と扶壁の付けられた身廊部 (東西約 17.5 メートル、南北約 6 メートル) の側壁が残るのみである。身廊内部は 2 ベイからなり、各ベイにおいては南側の壁に、ピラストルのインポストの上に架かる二重になった大きな半円形の壁アーチが付けられ、その中にはそれぞれ半円頭形の出入口が開く。東側の出入口は聖職者用で、かつて聖堂南側にあったクロワトル (回廊) に通じていた。西側の出入口は信者用であったと思われる。各出入口の上には、内部に向けて隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている。それらの窓の枠組みも二重になっている。窓はこの他にも西壁と東の後陣にも開けられている。北壁には開口部はまったくない。身廊の壁面は切り整えられた中石材がきっちりと積まれたものとなっている。

この聖堂の近くでは 10-11 世紀頃のものと思われる大理石板の碑銘が発見されている。このサン＝テュジェーヌ教会の他、ユゼスにあったいくつもの聖堂の名前が列挙されており、おそらくは寄進・所有関係を確認し表示したものなのであろう。

Albiouse (1887) p.39; Albiouse (1903) p.88; Béraud (1947) p.321; Clément (1993) pp.276-277; Sallustien-Joseph (1899) pp.98-104.

30.2.1e ユゼス／サン＝ジェニエス教会 (Église Saint-Génès, Uzès) 遺構

ユゼスからサン＝タンブロー方面に向かう県道 D979 を北へ約 1 キロで« chemin de Saint-Génès »が東に分かれる。それを 100 メートルほど入ったところにサン＝ジェニエス教会の後

陣部の遺構が残っている（D979 から見える）。この遺構を東側（つまり後陣の外側）から見る時、松の木を背景にして小高い丘にたたずむその姿は、廃墟であるが故に醸し出される誠に味わい深い趣を呈している。1980 年代になってこの周囲に宅地開発の波が押し寄せ、サン＝ジェニエスの後陣のすぐそばにも開発業者によって新しい住居がいくつも建てられたが、ユゼスにおける文化遺産保護運動の結果、それらの住居は取り払われ、この場所の美しい歴史景観はとりあえずは守られることとなった。



30.2.1e Église Saint-Génies.

サン＝ジェニエス、すなわち聖ジェネシウス（saint Genesius）は、古代アルルの法務書記官であった。キリスト教徒に対する迫害に反対し、ローヌ川を泳いで渡って逃亡したが、捕らえられた後アルルに連れ戻されて 303 年（または 308 年）にアルルのすぐ北のトランクタイユで斬首された。彼は自らの血を浴びて洗礼を受けたのだとも言われる。さらに伝説によると、アルルから逃亡したジェネシウスが捕らえられたのがユゼスに近いこの場所で、後にここに女子修道院と礼拝堂が建てられたが、8 世紀前半頃にイスラーム勢力によって破壊された。その後 11 世紀後半から 12 世紀前半頃に、現在遺構が残るサン＝ジェニエス教会が再建された。ユゼス司教が所有した聖堂の中でも最も古いものの 1 つに数えられる。またこの場所にできたウィラは「villa Sancti Genesii」と呼ばれた。

サン＝ジェニエス教会は、もとは平面プランがラテン十字形の聖堂で、東西約 20 メートル、南北 8 メートルの身廊は 3 ベイ（あるいは 5 ベイとの説もある）からなり、トランセプトの東側に主後陣とその左右に小後陣が付けられていた。身廊に関しては、単身廊形式ではなく 3 廊式であったとする見方もある。しかしいづれにせよこの身廊とトランセプトは 16 世紀の宗教戦争の際に破壊されてしまった。現在残る半円形の大きな主後陣（高さ 7.4 メートル）とその左右（南北）の小後陣には、外部に装飾的な厚みのないピラストルが並び、その上に半円形の小アーチが 2 つ一組となって連なるロンバルディア帯が付けられている。南側の小後陣ではこのロンバルディア帯のすぐ上に水平のコーニスが巡っている。おそらく他の 2 つの後陣部でも同じであったと思われる。中央の主後陣と南側の小後陣には隅切りされた半円頭形の窓が開けられている（主後陣の窓は今では埋められている）。北側の小後陣は上半分が完全に失われているが、窓の名残は認められる。この 3 つの後陣の石積みは、特に下半分は整形された中石材がきっちりとていねいに積まれたものであるが、土台部分はそれよりも荒い石積みとなっていて、明らかにその様相が異なる。それは 11-12 世紀よりも古い時代の建物のものなのかも知れない。左右の小後陣のさらに両側には南北方向に続く壁が部分的に残されており、これがトランセプトの名残であると考えられる。そのうち南側のトランセプト外壁の土台部分の石積みの中に、カロリング期のものと思われる碑銘（「Bertil」なる人物が 5 月に亡くなった云々）が刻ま

れた石が見つかっている。建物の内側（西側）は、主後陣と南側の小後陣では方形の小石材がきっちりと組まれた半ドームがきれいに残されている。また主後陣には長方形の石の土台が置かれ、その上には小円柱が乗せられ、さらに一番上には鉄製の十字架が据えられている。

Albiousse (1903) pp.47-48; Baudat et Creissen (2013) pp.40-61; Béraud (1947) pp.320-321; Buholzer (1962) p.123; Clément (1993) pp.275-276; Nougaret et Saint-Jean (1975) p.49; Sallustien-Joseph (1899) pp.305-318.

30.2.2 ラ・カペル=エ=マモレーヌ／サン=ピエール礼拝堂

(Chapelle Saint-Pierre, La Capelle-et-Masmolène)

ラ・カペル=エ=マモレーヌは、19 世紀初めにラ・カペルとマモレーヌの 2 つの集落が合併して作られたコミューンである。ユゼスから県道 D982 を東へ約 10 キロで D219 を北に曲がり、さらに 3.5 キロ進むとこのコミューンに入るが、その西側の旧マモレーヌの集落の中ほどに 19 世紀の新しい教会があり、そこから北へ 150 メートルほど歩くと、集落を見下ろすようにして小山の上に建つ古いサン=ピエール礼拝堂に至る。別名ドゥ・ラ・トゥール礼拝堂 (Chapelle de la Tour) あるいはサン=ミシェル礼拝堂 (Chapelle Saint-Michel) とも言う。東側の旧ラ・カペルの集落には 11 世紀にさかのぼる城館があり、1211 年に国王フィリップ 2 世 (オーギュスト) がユゼス司教に譲渡して以来、大革命までユゼス司教の夏の居館となった。一方西側のマモレーヌ地区には、やはり 11 世紀の領主アドゥラル (Adelard) の城 (castrum de Monmolena) があり、サン=ピエール礼拝堂は、もとはこの城の城塞礼拝堂であった。建設は 11 世紀終わり頃で、岩塊の上にベイ 1 つだけの身廊とその東に半円形の後陣が付くだけという小さなものであった。

12 世紀末頃、アルビジョワ十字軍の際に城とともに部分的に破壊されたが、14 世紀初め頃に、それまでの東西方向の建物に対して直角の南北方向に身廊が増築され、さらにこの新しい身廊の北側に五角形の後陣が作られた（ただしこの後陣は 17 世紀初め頃のものとする見方もある）。14-15 世紀の百年戦争の時代には集落を取り囲む周壁の一部となった。また 16 世紀の宗教戦争の時代になると、穀物倉庫として使われるなどした。その後、修復されるものの 17 世紀になって、とりわけルイ 13 世とリシュリユーの治世下で再び破壊の憂き目を見た。同じ世紀の終り頃には何度目かの修復が行われ、18 世紀のカミザール戦争の時に、南ファサードや後陣の窓がふさがれた。大革命に際しては、マモレーヌの司祭は革命政府への宣誓を拒否して処刑されている。1824 年には南ファサードの上に大きな鐘楼が加えられたが、そこに吊されていた鐘は 1860 年に村の新しい教会に移された。礼拝堂自体も使われなくなり、うち捨てられて荒廃が進んだが、20 世紀に入ってから本格的な修復工事が進められ、今日に至っている。

聖堂は南北方向に建てられたラテン十字の形をしており、半円形となった東側のトランセプ

トが付いているように見えるが、先に述べたように実際はこの半円形の部分がかつての小聖堂の後陣である。その旧後陣は、わずかに未広がり台形となっていて、土台部分と上部は不整形の石の乱積みで、その間の言わば本体部分の壁面は、小石材～中石材がていねいに積まれたものとなっている（ただし上部の石積みは近年の修復によるものであろう）。中央には縦に長い方形の窓が開けられている。聖堂北側の新しい後陣は五角形で、左右（東西）の面には半円頭形の窓が開けられている



30.2.2 La Capelle-et-Masmolène

が、中央（北側）の面には窓はない。また西側の面の窓の下には方形の大きな出入口が開けられている。これは今は失われた聖具室へと通じていたものである。聖堂北側の壁面には開口部は見られない。南ファサードには方形の扉口が開き、その上には丸窓、そして切妻の上に大きな鐘楼が立つ。鐘楼の切妻の上にはギリシア十字が据えられている。扉口と丸窓の間には、今は埋められてしまった2つの半円頭形の窓の名残（枠組みのみ）が残されている。

聖堂内部は2ベイからなる単身廊で、北側に内部が五角形となった内陣（後陣）が続く。その上には同じく五角形の半ドームが載る。身廊北側の最初の（南側の）ベイには半円形の壁アーチが付けられている。このベイにはかつてトリビューンとそこに登るための階段があったが、今は取り払われて何もない。このベイと内陣の天井は南北方向に連続する半円筒ヴォールトであるが、2段の石段をへて北に続く中央のベイは、古い聖堂の身廊であったためにそれとは直角の東西方向の半円筒ヴォールトとなっている。旧後陣は半円形で半ドームが架けられており、中央には内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている（この窓は外部は方形である）。この旧後陣部はシンプルであるが、12世紀ロマネスクの雰囲気を今によく伝えるものであると言えよう。

Clément (1993) p.378; Moreau (1997) pp.91-92; Site officiel de la commune de La Capelle-et-Masmolène.

30.2.3 サン=ティポリット=ドウ=モンテギユ／サン=ティポリット教会

(Église Saint-Hippolyte, Saint-Hippolyte-de-Montaigu)

ユゼスから県道 D982 を東へ約 7 キロである。サン=ティポリット教会は集落のほぼ中ほど、県道から北へ 10 メートル入ったところに建っている。3 ベイからなる東西約 13 メートルの身廊の東に半円形の後陣が続くというシンプルな形である。西ファサードは 19 世紀以降の新しい建築である。方形の扉口の上に半円頭形の窓、そして一番上に二段構えになった方形の鐘楼が立つ。内部にあっては、天井には半円筒形ヴォールトが架かり、横断アーチが 3 つ付けられ

ている。西の端にはトリビューンがある。これらも古いものではない。12 世紀ロマネスク期のいかにも古びた雰囲気は、東側の後陣の姿によく保存されている。この後陣は、聖堂の南に隣接するオリーブオイルの販売店（2018 年現在）の敷地に入ると見ることかできる。南北に住居その他の建物が接続しているので、その全体の姿を完全に見渡すことはできないが、形は半円形で、不整形の石が荒積みされている。外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓（縦と横がほぼ同じ大きさ）が付けられている



30.2.3 Saint-Hippolyte-de-Montaigu

るが今は埋められている。後陣上部には横長の石が水平に並べられたコーニスが巡り、そのすぐ下にはその石を縦にしてはめ込まれたモディオンが並べられている。それらのモディオンは、かなり傷んではいるが、図形的な彫刻が施されたものである。なお聖イポリット、すなわち聖ヒッポリュトスは、270 年にサルディーニャにおいて殉教した聖人で、初期キリスト教時代の対立教皇であったとも言われる。

Fabricius (2008) pp. 37-50; *Midi Libre* (2010.11.3) .

30.2.4 サン=シフレ／サン=シフレ教会 (Église Saint-Siffret, Saint-Siffret)

サン=シフレのコミュニオンは、ユゼスから県道 D982 を東へ 3.5 キロで D404 に入り、さらに南へ約 1.5 キロである。村の北端の D404 沿いには 16 世紀に建てられたルネサンス様式の城がある（個人所有で現在はシャトーホテル）。もう 1 つのさらに古い城は村の東側（県道 D305 の東）にあって、12 世紀のテンプル騎士団のコマンドリーと呼ばれ、居館の一部と方形の塔が残っている。実際にテンプル騎士団のものであったのかどうかについては確かなことは分らないが、中世の間はユゼスの司教座聖堂参事会がここを所有し、14 世紀のペスト渦の際にはその避難場所にもなった。16 世紀の宗教戦争の際にはカトリックとプロテスタントの争奪が繰り返されている。サン=シフレ教会はこの城のすぐ南側に隣接する形で建っている。12 世紀後半の建設で、隣接する城館と同様、ユゼスの司教座聖堂参事会が管理し、参事会長がサン=シフレ教会の司祭を務めた。

県道 D305 から 40 段ほど石段を登ると西ファサードの前に出る。さらに 3 段の石段の上にある扉口には半円形のモールディングに縁取りされた二重のアーキヴォルトが架かる。内側のヴェシュールを左右で受け止めていた小円柱は失われている。向かって右側にはその小円柱の上に付けられていた植物文様の柱頭が、かなり破損しているがかろうじて残されている。扉口の上に開けられた丸窓も、その上部に半円形のモールディングが付けられている。三角形の切妻の上には 19 世紀の鐘楼が立つ。聖堂の南壁には扶壁が付けられている。南側のトランセプト状に増築された礼拝室のかなり上の屋根に近い位置に、隅切りされた半円頭形の窓が 1 つ開け

られている。後陣は五角形で、中央に半円頭形で縦長の窓が開けられている。外壁は西ファサードや後陣部も含めて全体的に切り整えられた中石材がきっちりと積まれている。

聖堂内部はもともとは3ベイからなる単身廊形式であったが、後の時代に東側のベイの南北にそれぞれ礼拝室が増築されて、トランセプトを備えたラテン十字形となった。各ベイの側壁には厚みのある大きな半円形の壁アーチが付けられている。モールディングを伴った水平のコーニスの上に、半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる。二重になった凱旋アーチの東側には後陣が続く。この後陣は、外部



30.2.4 Église Saint-Siffret

は五角形であったが内部は半円形となっていて、パルメットが連続する非常に精巧な水平のフリーズの上に半ドームが架けられている。後陣中央には半円頭形の窓が開けられ、ステンドグラスがはめられている。

Béraud (1947) p.94; Clément (1993) pp.277-278; Moreau (1997) pp.212-214.

30.2.5 セルヴィエ=エ=ラボーム／サン=マルタン教会

(Église Saint-Martin, Serviers-et-Labaume)

ユゼスから北西に延びる県道 D981 を7キロでセルヴィエ=エ=ラボームのコミューンの北の入口に至る。そこからさらに県道 D136 に入って古い旧ヴィラーージュへ向けて南へおよそ 350 メートルである。もとはサン=ジル修道院の所有する聖堂で、教皇カリストゥス 2 世(在位 1119-1124 年)の教書の中にその名が見い出せる。最初は 12 世紀初めに建てられたが、13 世紀初め頃に改修・増築の手が加えられた。さらに 17 世紀になって西ファサード、身廊のヴォールト、後陣の半ドームなどが再建された。

サン=マルタン教会は、ローヌ川沿いのサン=サテュルナン=デュ=ポール、すなわち現在のポ



30.2.5 Serviers-et-Labaume

ン=サン=テスプリ経由で波及したサン=ジルの影響、つまり言い換えればクリュニーの影響を受けたものであると言われる。現在の建物は、何よりもまず身廊部の南北に連なる分厚くて大きな扶壁の列が印象的である。南側にはきれいに4つ並び、北側では西から2つ目のものが張出しの少ないものになっている。これらの扶壁と、上部が切妻となった横長の西ファサード、そして半円形の後陣は整形された中石材がきっちりと積まれた壁面で、17 世紀の改修によるも

のである。西ファサードには古典様式の方形の扉口があり、そのすぐ上にはかつてそこに付けられていた三角形のペディメントの名残が見て取れる。さらにその上に丸窓が開けられ、一番上には 20 世紀になって作られた新しい小鐘楼が立つ。身廊側壁には南側に 2 つ、北側には 1 つ、巨大な扶壁の間に半円頭形の窓が開けられている。側壁最上部には屋根のすぐ下に二段構えになったコーニスが水平に付けられている。後陣中央には隅切りされた半円頭形の窓が開けられている（窓自体は現在は埋められている。）。12 世紀の最初の建築の名残は現在の建物の土台部分に残されている。

Clément (1993) p.222; RIP.

30.2.6a エガリエ／城塞礼拝堂 (Chapelle du Castellat, Aigaliers) 遺構▲

ユゼスから県道 D981 を北西へ約 7 キロでセルヴィエ＝エ＝ラボームとなり、そこからさらに D115 を経由して 3.5 キロでエガリエの集落に至る。この地は 11 世紀頃にはユゼスの領主エルゼアール (Elzéart d'Uzès) の領地に組み入れられていたが、実際の支配はその臣下であるエガリエの在地領主の手に委ねられていたようである。アルビジョワ十字軍の後にはユゼスの領主と共にトゥールーズ伯との関係から離脱したが、財政的には困窮したようである。後にガラス製品の製造などに手を染めている。エガリエの城 (Le Castellat) は集落のすぐ北の山の上にある。14 世紀後半に破壊されて廃墟化した。そこには城館や塔の土台とともに城塞礼拝堂の遺構もその土台部分だけが残されている。小さな単身廊形式で、半円形の後陣がその東側に付けられている。なお筆者が訪れた 2014 年の時点ではこの城へ登る山道は崩れかけており、アクセスが困難な状態であった。

RIP.

30.2.6b エガリエ／ガッティエグのノートル＝ダム教会

(Église Notre-Dame de Gattigues, Aigaliers)

ガッティエグは、エガリエの村役場から南に約 1 キロ少し行っただけにある小集落である。ノートル＝ダム教会は県道 D715 と D125 の交差点から 100 メートルほど北の、D715 沿いに建っている。ここに小修道院と聖堂が最初に創建されたのは 7-8 世紀頃とも言われるが、現在残る建物は、12 世紀になってオーヴェルニュのラ・シェーズ＝デュ修道院のもとで整備されたものである。平面プランは身廊、トランセプト、横に 3 つ並ぶ後陣からなるラテン十字形であるが、後代の建物が身廊西側の南北に増築されている（壁面の色が異なるので容易に見分けられる）。西ファサードの扉口には、歯車文様の帯に縁取りされた非常に大きな二重の半円形のアーキヴォルトが架かり、その奥まった中に三角形のペディメント（その塔頂部は切れていて聖母マリア像が置かれている）と方形の側柱に囲まれた半円頭形の出入口が開けられている。二重になったアーキヴォルトの間には円筒形の太いモールディングが付けられている。このモールディングは扉口の左右において、柱頭彫刻付きの小円柱が受け止める。この小円柱は柱身

自体は新しいものであるが、基壇の丸いトルスと柱頭の上に載る冠板は 12 世紀のオリジナルのものであろう。冠板の彫刻は傷みが激しいが、向かって左側のものはパルメット文様がよく残っている。アカンサスと渦巻きが彫刻された柱頭は、左右とも近年において復元されたものである。大きなアーキヴォルトの上には、半円形のヴシュールが付けられた半円頭形の窓が開けられている。外部に向けて隅切りされ、そのヴシュールは細いモールディングで縁取りされ、柱頭彫刻付きの小円



30.2.6b Notre-Dame de Gattigues

柱が受け止めている。この窓と、さらにその上の切妻部分、そして一番上に立つペディメント付きの大きな鐘楼は近代になってからのものである。

東側の後陣は、半円形の主後陣とその左右両側にやはり半円形の小後陣が並ぶというものである。一見すると左右の小後陣が南北方向に向いた三つ葉形のような印象を受けるが、それは左右の小後陣の上部（屋根）が、外側（つまり南北方向）に向けて傾斜しているからということ（ただし建設当時からそうであったわけではないと思われる）、さらにそれらの小後陣に開けられた半円頭形で隅切りされた大きな窓が、真東ではなくそれぞれ南北方向に向けて少しずつ放射状に開けられているからであろう。それらの窓は、主後陣の窓（小後陣のものよりも小さくて隅切りされていない）も含めて、半円形の細いモールディングによって縁取られている。なお主後陣の窓はかつては埋められていたが、2000 年代になって再び開けられた。後陣およびトランセプトの壁面は、切り整えられた中石材がきっちりと組まれた石積みとなっている。北側のトランセプトの壁には丸窓が開けられている。

聖堂内部は、1 ベイの身廊の東に交差部、そして内陣と主後陣が続く。主後陣は小さな方形の出入口を介して南北の小後陣とつながっている。また水平のコーニスの上に半ドームが架かる。この主後陣の壁面には、中央に開けられた隅切りされた半円頭形の窓の枠組みも含めて、おそらくは近代になってからのものと思われる装飾的なフレスコ画が、やや過剰とも思われるほど描かれている。身廊の西側のベイに付けられた南北の礼拝室は、14 世紀になって増築されたものである。

Clément (1993) pp.176-178.

30.2.6c エガリエ／ブリュエスのサン＝ピエール教会

(Église Saint-Pierre de Brueys, Aigaliers)

エガリエの村役場 (mairie) から県道 D115 を北へおよそ 3.5 キロで« Bourdiguet »の集落となり、その集落の西端からさらにブリュエスに向かう細い道に入って西へ約 800 メートルである。ここにはかつてはアキルリオ (Aquilerio) と呼ばれる城があった。13 世紀初め頃にはトゥ

ールーズ伯の所領でもあったが、その後はユゼス司教に従うエガリエの領主の支配地となった。この城地にあったサン=ピエール教会は、中世の間はヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのサン=タンドレ修道院の管理下に置かれていた。城は 14 世紀になって百年戦争の混乱の中で破壊された。19 世紀には農家となり、サン=ピエールも養蚕施設として使用されたが、現在は個人の住居の一部となっている。2 ペイからなる身廊部とその東に続く半円形の後陣が残されているが、その上に 19 世紀頃の建物が増築されて高さがかさ上げされている。なお現在は私有地の敷地の中であって通常はアクセスできない。

Clément (2001) p.241; Moreau (1997) p.19.

30.2.6d エガリエ／ブリュエスのノートル=ダム礼拝堂

(Chapelle Notre-Dame de Brueys, Aigaliers) 遺構▲

ブリュエス地区のすぐ南にある小山の上にはガロ=ローマ時代以前からのオッピドゥム « Oppidum de la Dame de Bruyes » があり、周壁や城門、住居などとともに、オッピドゥムのほぼ中ほどに 11 世紀頃のものと思われる礼拝堂の遺構が発掘されている。ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのサン=タンドレ修道院の所有する礼拝堂とされ、P. A. Clément はその建設を 9 世紀あるいは 10 世紀頃にまでさかのぼるものとしている。20 世紀に行われた発掘調査によると小さな身廊と半円形の後陣の土台が残されているようであるが、現在は判別が難しくなっている。またこの場所へのアクセス自体も困難である。

Clément (2001) p.241; Provost et al. (1999) p.105.

30.2.7 ブルディック／サン=ジャン=バティスト教会 (Église Saint-Jean-Baptiste, Bourdic)

ユゼスから県道 D982 を西へ向かい 6 キロでオレイヤックを過ぎ、さらに 3 キロ進むと D136 と交わる。それを南に折れると 1.2 キロでブルディックのコミューンに至る。サン=ジャン=バティスト教会は、D136 から 50 メートルほど東に入ったところに建っている。コミューンのほぼ東端にあたる場所である。

12 世紀の最後の四半世紀の間に建設されたとされる。サント=アナスタジーにある聖アウグスティヌスの会則に従うサン=ニコラ・ドゥ・カンパニャック小修道院 [30.2.8] に属していた。平面プランは身廊、トランセプト、後陣というラテン十字形である。西ファサードは、下に行くほど広がる扶壁が左右両側に付けられているために、全体的に台形となっている。近代になってから作られたと思われる扉口は、中心軸からわずかに北側にずれたところに開けられている。水平のコーニスの上に半円形のヴシュールが架かるシンプルなものである。その上には切妻の中ほどのところにロマネスク様式の半円頭形で細長い窓が開けられている。一番上には 19 世紀に作られた縦長の鐘楼が立っている。身廊外壁には太くて強力な扶壁が南北に付けられている。南北のトランセプトは身廊の大きさに比較するとかなり大きなものである。半円形の後陣上部には 14 もの小アーチがアーケードとなって連なるロンバルディア帯が巡らされている。

それぞれのアーチは3つのクラヴォーから組み、図形的な彫刻が施された正方形のモディオンがアーチとアーチの間の起拱部を受け止めるようにして並んでいる。後陣の壁面は、切り整えられた中石材が端正に積まれたものである。後陣中央には隅切りされた半円頭形の大きな窓が、また南側にはそれよりも小さな窓が開けられている。後陣北側には今は窓はないが、かつては開けられていた。この後陣の南側にはコンクリート製の聖具室が増築されており、多少ともロマネスク聖堂の外観をそこなうものとなっている。



30.2.7 Saint-Jean-Baptiste de Bourdic

西ファサードの扉から聖堂内部に入ると、2ベイからなる身廊で、各ベイの側壁には半円形の壁アーチが並ぶ。西側のベイにはトリビューンが作られている。身廊の天井には水平のコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。各ベイは半円形の横断アーチで区切られている。交差部の上には4隅に扇形のトロンプがあり、その上に八角形のクーポールが載る。一番上にはゆるやかな八角形のコーニスの上に円形のドームが架けられている。南北のトランセプトはシンプルな作りとなっており、それぞれ東西の壁面には半円形の壁アーチが付けられている。半円形の後陣は東西幅の狭い内陣とセットになっていて祭壇とその上に高さのあるキリストの磔刑像（木像）が置かれている。後陣は水平のコーニスの上に半ドームが架けられ、中央の窓にはステンドグラスがはめられている。

ブルディックのサン＝ジャン＝バティスト教会は、1970年にエムリック神父の主導によって、とりわけ聖堂内部の大々的な修復工事が行われた。また2019年にはコミュニオンと教区の共同によって、照明設備など内部の整備が進められた。こうしたことにより、ロマネスク聖堂の雰囲気がいよいよ復元・維持されることとなったことは、教区民にとっても、またここを訪れる文化遺産愛好者にとっても、共に幸いなことであると言えよう。

Clément (1993) pp.282-283; *Midi Libre* (2019.2.11) ; RIP.

30.2.8 サント＝アナスタジー／サン＝ニコラ＝ドゥ＝カンパニャック小修道院附属教会

(Priuré Saint-Nicolas de Campagnac, Sainte-Anastasie)

ユゼスから県道 D979 で南へ約 9 キロである。ガルドン川に全長約 120 メートルのサン＝ニコラ橋 (Pont Saint-Nicolas) が架かっている。この橋は、最初は 13 世紀に建設され、大きなアーチと橋脚が連なり、最も高い中央部に向けて両側から傾斜が付けられたものであったが、19 世紀後半にその傾斜が取り除かれフラットな形に変えられた。その後、第二次大戦の際にドイツ軍によって一部分破壊されたり、21 世紀に入ってからガルドン川の洪水によって被害を

受けたりしたが、そのたびに修復され、現在でもユゼスとニームを結ぶ交通量の多い県道の橋としての役割を果たし続けている。

サン=ニコラ=ドゥ=カンパニャック小修道院（プリウレ）は、この橋の北のたもとに建っている。この場所にはガロ=ローマ時代からオッピドゥムがあり、またユゼスとニームを結ぶ交通路がガルドン川を渡る交通の要所でもあった。小修道院は、ここに橋が架けられる 1 世紀ほど前の 12 世紀半ばから後半にかけて、ユゼスに本拠を置き聖アウグスティヌスの会則に従う聖堂参事会によって創建・建設された。国王ルイ 6 世（ル・グロ）の 1156



30.2.8 Saint-Nicolas de Campagnac

年の勅書の中にその名が見い出せる。創建後はユゼス副伯の保護を受けたとも言われる。中世の間は、周辺の森林や牧草地などからの収益によって、経済的には概して豊かな運営が続けられた。しかし 16 世紀の宗教戦争によって大きな被害を受け、次の 17 世紀にアウグスチノ（聖アウグスティヌス）修道会によって修復された。付属教会は 1670-1678 年に修復されている。その後このプリウレは、同じアウグスチノ会系であるパリのサント=ジュヌヴィエーヴ修道院会（コングレガシオン）が所有するが、大革命の後には国有財産として売却された。最近まで農家が所有し、付属聖堂も穀物倉庫として使われるなどして傷みも進んでいた。しかし 2020 年になって歴史的文化遺産の保存に理解のある所有者に変わり、一般公開を目指して建物の整備が進めている。

聖堂は身廊、トランセプト、後陣から構成されるラテン十字形である。建設は 12 世紀後半であるが、身廊の半円筒形ヴォールトと後陣の半ドームは、モディヨンの並ぶ水平のコーニスとともに 17 世紀に架け直されたものである。西ファサードには下に半円頭形の扉口が付けられているが、現在は埋められている。その上には三角形の切妻のすぐ下に、隅切りされた半円頭形の窓があるが、これもまた今は埋められてしまっている。西ファサードの北西端には方形の鐘塔が建てられていたが、上の部分を切り詰める形でわずかにその名残をとどめている。身廊部の側壁には扶壁が並ぶ。南側では扶壁の間に半円頭形の大きな窓が開けられていて、東側の窓は埋められることなく今でも採光の役割を果たしている。トランセプトの北翼には農家の建物が接続しているが、南翼では三角形の切妻の下に細長い半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。半円形の後陣は 1678 年の修復工事の際に高さが加えられ、かさ上げされた部分に新たに 3 つの窓が開けられた。近年までこれらの窓は埋められていたが、最近になって新しい所有者によって元通りに開けられた。また後陣東端の中ほどの高さに残されていたかさ上げされる前の古い窓も、完全に埋められた状態が続いていたが、同様に最近になって再び開けられた。

この聖堂は、外部と同様に内部においても、あたかもシトー派のそれのように簡素かつ厳格な雰囲気をとどめている。身廊は 2 ペイからなる。17 世紀に高さの加えられた天井は半円筒

オールトで、半円形の横断アーチが架かる。オリジナルである側壁には各ベイに半円形の壁アーチが付けられている。窓は南側の壁だけに開けられている。トランセプトから半円形の後陣部まで、ヴォールトの起拱点にはモディオンがずらりと並ぶ水平のコーニスが巡らされている（ただしこのコーニスも 17 世紀のもの）。半円形の後陣には中央にオリジナルの半円頭形の小さな窓が開けられ、その上に 17 世紀の大きな窓が 3 つ並ぶ。12 世紀の壁面と 17 世紀の壁面は組石の色が異なるので、一見してその境目がはっきりと分かる。後陣の上には半ドームが架けられている。トランセプトの北翼には東側に、外部は平面の壁となっているが内部は半円形となった小後陣が付けられている。水平のコーニスの上に半ドームが載る。その東端には古いロマネスク期の窓の下半分を取り壊す形で、恐らくは 19 世紀に所有者の農家によって方形の出入口が開けられた（荷車やトラクターが通れるようにするためであろう）。トランセプト南翼にももともとは半円形の小後陣が付けられていたが、取り壊されてしまった。しかしこれも最近になって、新しい所有者のもとで不完全ながらも復元が試みられている。

Bardy et al. (1966) pp.140-141; Clément (1993) pp.281-282; Germer-Durand (1864) pp.5-23; *Midi Libre* (2021.7.7) Morel (2007) p.61; Nougaret et Saint-Jean (1975) p.42.

30.2.9 コリアス／ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラヴァルのエルミタージュ

(Ermitage Notre-Dame-de-Laval, Collias) ▲

ユゼスから県道 D981 を東のルムーラン方面へ約 7 キロ行き、南に向かう D3 に入る。3.5 キロでコリアスのコミューンに入るが、ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラヴァルのエルミタージュ（隠修所）はこのコリアスから直線距離にして約 2 キロ南東の山中にある。北からアクセスする場合は、コリアスからガルドン川南側（右岸）に沿って続く「chemin de Saint-Privat」を東に約 1.2 キロ進み、そこから南の山中へと分け入る山道をおよそ 3 キロほど歩くとエルミタージュである。南からアクセスする場合は、コリアスから県道 D3 をいったん南へ 6.5 キロ進み、左折して「Chemin du Mas de Laval」（ただし道路標識などはない）に入り、今度は 2 キロほど北上する。すると「La Terre de l'Aire」と呼ばれる小集落が現れるので、その小集落の裏手からさらに 800 メートルほど北へ進んだあたりで右手（東）に分かれる山道に入る。そこから約 200 メートル歩き、最後の 100 メートルほどは急な崖の斜面を下ると、大きな岩山の陰に隠れるようにしてあるエルミタージュに到達する（なお筆者が訪れようとした 2014 年にはエルミタージュ全体が閉鎖されていて見ることはできなかった）。

この場所にはガロ＝ローマ時代にはジュピターなどの神々を奉る神殿があった。岩山の下には洞窟があり、7 世紀には隠修士が住むエルミタージュが営まれるようになっていた。彼らに大きな影響を与えたのは、7 世紀後半にやはりガルドン川のこのあたりで隠修生活を行い、後にアヴィニヨンの司教にもなった聖ヴェレデーム／ヴェレデミウス（saint Vérédème／Veredemius）であろう。彼はこのラヴァルのエルミタージュを訪れることもあったと言われたりするが、あまり確かなことではない。彼の名前が冠された洞窟（Grotte de la Baume Saint-Vérédème）は、こことは別にコリアスからガルドン川に沿って 5 キロほど西へ歩いたところ

にある岩山の中腹に残っている。

ラヴァルのエルミタージュには 9 世紀頃には小規模な修道院が作られていたようである。さらに 10 世紀には洞窟から東へおよそ 30 メートルの場所に礼拝堂が建てられた。この古い礼拝堂は、単身廊に半円形の後陣が付くだけというシンプルなもので、現在はわずかな土台部分の遺構しか残っていない。11 世紀になると今度は聖母マリアに捧げられた教会が、その少し北西の、エルミタージュの洞窟により近い場所に新たに建てられた。現在われわれが目にする建物がそれで、東西約 12 メートルの長方形の身廊に方形の後陣（12 世紀）が付き、さらにその東側に方形の鐘塔が続く。ただしこの鐘塔自体は崩落してしまっており、身廊との間の壁に付けられていた半円形の壁アーチと外側に向けて大きく隅切りされたロマネスク様式の窓、そして身廊との間を行き来するために、壁アーチのさらに下に開けられた半円頭形の出入口などが残されている。1 ベイからなる身廊は、現在は後陣部分との間に壁が作られているために直接は行き来できない。身廊の東の部分には石の祭壇が置かれており、そこが言わば仮の「内陣」のようになっている。この身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。南側の側壁にはロマネスク様式の窓が 2 ヶ所開けられている。また「内陣」部分のヴォールトの壁面には、19 世紀頃のものと思われるフレスコ画が残されている。かつては身廊がもっと西にまで延びていたが、17 世紀に切り詰められて現在の西ファサードが作られた。そこには方形の扉口が付けられ、その上にやはり方形の小さな窓が 3 ヶ所開けられている。切妻の上には鐘楼が立つが、鐘はなくなっている。このファサードの西側に残されている建物の壁は、かつての身廊の名残であると思われる。聖堂の壁は全体的に不整形の小石材が荒積みされている。M. Christol らによれば、2005 年に身廊南側の外壁から、ニームの古代水道で使われていた石材が組み込まれているのが見つかったという。またこの聖堂内外において、古代の墓碑が複数見つかっており、これらのことからこの場所の古さがよく分かる。

ラヴァルのエルミタージュにおける最後の隠修士はルイ・メラン（Louis Mailhan）という人物で、1839 年までこのエルミタージュで隠修生活を送った後、79 歳で亡くなり、この地に葬られたという。

Bayol (1980) pp.7-29; Base Mérimée « Ermitage Notre-Dame-de-Laval » ; Christol et al. (2007) pp.15-32; Site des Amis du Patrimoine de Collias; RIP.

略記号と参考文献

（各聖堂のビブリオグラフィでは、文献などは和書、欧文文献、Web-site の順に、また GV と RIP は最後に記した）

CAF: *Congrès archéologique de France*.

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

- Albiouse, Lionel d' (1880) : *Guide archéologique dans la crypte d'Uzès, monument chrétien des premiers siècles de l'église*, Uzès.
- (1887) : *Histoire des ducs d'Uzès suivie d'une notice sur leur château ducal*, Paris, H. Champion, réédition, Lacour, 2002.
- (1903) : *Histoire de la ville d'Uzès*, Uzès, Imprimerie H. Malige, 1903, réédition, Lacour, 1994
- Bacou, Roseline (1963) : « L'abbaye Saint-André à Villeneuve-lès-Avignon » in *CAF (1963, Avignon et Comtat-Venaissin)*, Paris, Société Française d'Archéologie, pp.197-201.
- Barbut, Frédérique (2010) : *La route des abbayes en Languedoc-Roussillon*, Rennes, Éditions Ouest-France.
- Bardy, Benjamin et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, Ilc, Cévennes-Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont.
- Barruol, Guy (1995) : « Uzès, Crypte » in *Les premiers monuments chrétiens de la France, 1. Sud-Est et Corse*, sous la direction de Noël Duval, Paris, Picard.
- Barruol, Guy et al., dir. (2001) : *L'abbaye Saint-André de Villeneuve-lès-Avignon : histoire, archéologie, rayonnement*, Mane, Les Alpes de Limière.
- Baudat, Michel et Creissen, Claire-Lise (2013) : *Les saints d'Arles : Images de la sainteté en Provence, Histoire et iconographie*, Orléan, Rencontre avec le Patrimoine religieux.
- Bayol, Jean (1980) : *Ermitage de Collias, Notre-Dame de Laval*, Collias, Éditions Terre de Soleil.
- Béraud, Pierre (1947) : *Uzès, son diocèse, son histoire*, Uzès, Éditions de la Cigale, réédition, Nîmes, Lacour, 2008.
- Buholzer, Jean-François (1962) : « Notes sur quelques églises romanes du Gard » in *Annales du Midi*, tome 74, no.58, pp.121-137.
- Chantal, Maigret (2003) : « Le château oublié de Roquemaure (Gard) XIe-XIXe siècle » in *Archéologie du Midi médiéval*, tome 21, pp.115-139.
- Christol, Michel, et al. (2007) : « Le sanctuaire de la Combe de l'Ermitage à Collias (Gard) » in *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 40, pp.15-32.
- Clément, Pierre A. (1993) : *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- (2001) : « Les possessions de l'abbaye sur la rive droit du Rhône » in *L'abbaye Saint-André de Villeneuve-lès-Avignon : histoire, archéologie, rayonnement*, sous la direction de Guy Barruol et al., Mane, Les Alpes de Limière, pp.235-242.
- Cottle, Basil (2002) : *All the Cathedrals of France*, London, Unicorn Press.
- Droste, Thorsten (1990) : *La France romane*, Paris, Les Éditions Arthaud.

- Durand-Sendrail, Geneviève (1995) : « L'architecture grandmontaine dans le Midi languedocien entre 1150 et 1250 » in *Annales du Midi*, tome 107, no.209, pp.5-34.
- Duval, Noël, dir. (1995) : *Les premiers monuments chrétiens de la France. tome 1, Sud-Est et Corse*, Paris, Picard.
- Fabricius, Georges (2008) : *Saint-Hippolyte-de-Montaigu en Uzège*, Nîmes, Lucie éditions.
- Fabré, Marie-Luce (2000) : « La collégiale Notre-Dame de Villeneuve-lès-Avignon » in *CAF*, (157e session, 1999, Gard) , Paris, Société française d'archéologie, pp.455-465.
- Germer-Durand, Eugène (1864) : *Le Prieuré et le pont de Saint-Nicolas de Campagnac : fragment d'histoire locale*, Nîmes, Imprimerie Clavel-Ballivet.
- Hery, Paul (1968) : *Uzès, premier duché de France ou la voix des ombres*, Uzès, L'association culturelle et artistique d'Uzès.
- Mesqui, Jean (2000) : « Les châteaux d'Uzès » in *CAF* (157e session, 1999, Gard) , Paris, Société française d'archéologie, pp.377-411.
- Moreau, Marthe (1997) : *Les châteaux du Gard du moyen âge à la Révolution*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- Morel, Jacques (2007) : *Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Lyon, Éditions Autre Vue.
- Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert (1975) : *Languedoc roman*, Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.
- Panarotto, Serge (2007) : *Chapelles de Provence*, Aix-en-Provence, Edisud.
- Pérouse de Montclos, Jean-Marie, dir. (1996) : *Languedoc-Roussillon, Le guide du patrimoine*, Paris, Hachette.
- Provost, Michel et al. (1999) : *Carte Archéologique de la Gaul, 30, tome 2, Le Gard*, Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.
- Robin, Françoise (1999) : *Midi Gothique de Béziers à Avignon*, Paris, Picard.
- Sallustien-Joseph (1899) : « Quelques églises romanes du Gard » in *CAF* (64e session, 1897, Nîmes) , Paris, Société française d'archéologie, pp.305-318.
- Sapin, Christian (2014) : *Les cryptes en France : Pour une approche archéologique, IVe-XIIe siècle*, Paris, A. et J. Picard.
- Wagon, Bernard et al. (2016) : *Ville d'Uzès : Plan de sauvegarde et de mise en valeur, rapport de présentation*, Uzès.

Web-site

Base Mérimée.

(<http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/>) 2021.10.1 アクセス

Les Amis du Patrimoine de Collias.

(<https://www.amisdupatrimoinedecollias.com/collias.php>) 2021.11.20 アクセス

Site officiel de la commune de La Capelle-et-Masmolène.

(<http://www.lacapelle-masmolene.fr/>) 2021.11.10 アクセス

Midi Libre : Actualités Saint-Hippolyte-de-Montaigu, 2010.11.3.

(<http://histoireetcivilisationdeluzege.blogs.midilibre.com/>) 2020.10.15 アクセス